参考資料 3

昭和二十一年三月

一 くぎり符號の使ひ方〔句讀法〕（案）

文部省

本省で編修または作成する各種の教科書・文書などの國語の表記法を統一し、その基準を示すために、

一、送りがなのつけ方（案）

二、くぎり符號の使ひ方〔句讀法〕（案）

三、くりかへし符號の使ひ方〔をどり字法〕（案）

四、外國の地名・人名の書き方（案）

の四篇を印刷に附した。この案はその一つである。

諸官廳をはじめ一般社會の用字上の參考ともなれば幸である。

（文部省教科書局調査課國語調査室）

くぎり符號の使ひ方〔句讀法〕（案）

まへがき

一、この案は、明治三十九年二月文部省大臣官房調査課草案の句讀法（案）を骨子とし、これを擴充してあらたに現代口語文に適する大體の基準を定めたものである。

二、くぎり符號は、文脈をあきらかにして文の讀解を正しくかつ容易ならしめようとするものである。

三、くぎり符號は、左のごとき約二十種の中から、その文の內容と文體とに應じて適當に用ひる。

（一）主として縱書きに用ひるもの

（1）マル（句點）　。
（2）テン（讀點）　、
（3）ナカテン　・
（4）ナカセン　――又は―
（5）テンテン　……又は…
　　テンセン　……
（6）カギ　「　」
　　フタヘカギ　『　』
（7）カッコ　（　）
　　ヨコガッコ　（　）

以下補助的なもの

（8）ツナギ　＝
　　ツナギテン　ー
（9）ワキテン　、、、
（10）ワキセン　――
（11）疑問符　？
（12）感嘆符　！

（二）もつぱら横書きに用ひるもの

（1）ピリオド（トメテン）　．
（2）コンマ　，
（3）コロン（カサネテン）　：
（4）セミコロン（テンコンマ）　；
（5）引用符（カコミ）　《　》〝　（　）〝
以下補助的なもの
（6）ハイフン（ツナギ）　‐
（7）半ガッコ　）

右、各種の符號の呼び名は、その一部は在來のもので一部は取扱上の便宜のためにあらたに定めたものである。

四、くぎり符號の適用は一種の修辭でもあるから、文の論理的なすぢみちを亂さない範圍内で自由に加減し、あるひはこの案を參考として更に他の符號を使つてもよい。

なほ、讀者の年齢や知識の程度に應じて、その適用について手心を加へるべきである。

（一）　主として縦書きに用ひるもの

呼び名	符號	準則	用例
(1) マル	。	一、マルは文の終止にうつ。 正序（例1）例置（例2）述語省略（例3）など、その他、すべて文の終止にうつ。 二、「　」（カギ）の中でも文の終止にはうつ（例4）。 三、引用語にはうたない（例5）。 四、引用語の内容が文の形式をなしてゐても簡單なものにはうたない（例6）。 五、文の終止で、カッコをへだてゝうつことがある（例7）。 六、附記的な一節を全部カッコでかこむ場合には、もちろんその中にマルが入る（例8）。	（1）春が來た。 （2）出た、出た、月が。 （3）どうぞ、こちらへ。 （4）「どちらへ。」 「上野まで。」 （5）これが有名な「月光の曲」です。 （6）「氣をつけ」の姿勢でジーッと注目する。 （7）このことは、すでに第三章で説明した（五七頁參照）。 （8）それには應永三年云々の識語がある。（この識語のことについては後に詳しく述べる。）

(2)　テン　、

一、テンは、第一の原則として文の中止にうつ（例1）。

二、終止の形をとつてゐても、その文意が續く場合にはテンをうつ（例2 3）。

たゞし、他のテンとのつり合ひ上、この場合にマルをうつこともある（例4）。

〔附記〕この項のテンは、言はゞ、半終止符ともいふべきものであるから、將來、特別の符號（例へば「、」のごときもの）が廣く行はれるやうになることは望ましい。

用例の〔參照一〕は本則によるもの。また〔參照二〕は「、」を使つてみたもの。

三、テンは、第二の原則として、副詞的語句の前後にうつ（例5 6 7）。

（1）父も喜び、母も喜んだ。

（2）父も喜んだ、母も喜んだ。

（3）クリモキマシタ、ハチモキマシタ、ウスモキマシタ。

（4）この眞心が天に通じ、人の心をも動かしたのであらう。彼の事業はやうやく村人の間に理解されはじめた。

〔參照一〕この眞心が天に通じ、人の心をも動かしたのであらう。彼の事業は……

〔參照二〕この眞心が天に通じ、人の心をも動かしたのであらう、彼の事業は……

（5）昨夜、歸宅以來、お尋ねの件について（、）當時の日誌を調べて見ましたところ、やはり（、）そのとき申し上げた通りでありました。

（6）お寺の小僧になつて間もない頃、ある日、をしやうさんから大そうしかられました。

（7）ワタクシハ、オニガシマヘ、オニタイヂニ、イキマスカラ、

（8）私は反對です。

（9）私は、反對です。

（10）しかし私は、

（11）しかし、私は……

（12）今、一例として、次の事實を報告する。

（13）また、私は……

（14）たゞ、例外として、

その上で、口調の上から不必要のものを消すのである（例5における（、）のごときもの）。

〔附記〕この項の趣旨は、テンではさんだ語句を飛ばして讀んでみても、一應、文脈が通るやうにうつのである。これがテンの打ち方における最も重要な、一ばん多く使はれる原則であつて、この原則の範圍内で、それ〴〵の文に從ひ適當に調節するのである（例8 9 10 11）。

なほ、接續詞、感嘆詞、また、呼びかけや返事の「はい」「いゝえ」など、すべて副詞的語句の中に入る（例12 13 14 15 16 17 18）。

四、形容詞的語句が重なる場合にも、前項の原則に準じてテンをうつ（例19 20）。

五、右の場合、第一の形容詞的語句の下だけにうつてよいことがある（例21 22）。

六、語なり、意味なりが附著して、讀み誤る恐れがある場合にうつ（例23 24 25 26）。

七、テンは讀みの間*をあらはす（例26 參照27）。

八、提示した語の下にうつ（例28 29）。

九、ナカテンと同じ役目に用ひるが（例30）、特にテンでなくては、かへつて讀み誤り易い場合がある（例31）。

十、對話または引用文のカギの前にうつ（例32）。

十一、對話または引用文の後を「と」で受けて、その下にテンをうつのに二つの場合がある（例33 34 35）。

「といつて、」「と思つて、」などの「と」にはうたない。

(15) たゞし、汽車區間を除く。
(16) おや、いらつしやい。
(17) 坊や、お出で。
(18) はい、さうです。
(19) くじやくは、長い、美しい尾をあふぎのやうにひろげました。
(20) 靜かな、明るい、高原の春です。
(21) まだ火のよく通らない、生のでんぷん粒のあるくず湯を飲んで、
(22) 村はづれにある、うちの雜木山を開墾しはじめてから、彈き終つて、ベートーベンは、つと立ちあがつた。
(24) よく晴れた夜、空を仰ぐと、
(25) 實はその、外でもありませんが、
(26) 「かん、かん、かん。」
(27) 「かん〳〵〳〵。」
(28) 秋祭、それは村人にとつて最も樂しい日です。
(29) 香具山・畝火山・耳梨山、これを大和の三山といふ。
(30) まつ、すぎ、ひのき、けやきなど
(31) 天地の公道、人倫の常經
(32) さつきの槍ヶ岳が、「こゝまでおいで。」といふやうに、
(33) 「なんといふ貝だらう。」といつて、みんなで、いろ〳〵貝の名前を思ひ出してみましたが、
(34) 「先生に聞きに行きませ

「と、花子さんは」といふやうに、その「と」の下に主格や、または他の語が來る場合にはうつのである。

十二、並列の「と」「も」をともなつて主語が重なる場合には原則としてうつが、必要でない限りは省略する（例36 37 38 39）。

十三、數字の位取りにうつ（例40 41 42）。

〔附記〕現行の簿記法では例40 41のごとくうつが、わが國の計數法によれば、例41は42のごとくうつのが自然である。

(35) う。」と、花子さんは、その貝をもつて、先生のところへ走つて行きました。

(36) 「おめでたう。」「おめでたう。」と、互に言葉をかはしながら……

(37) 父と、母と、兄と、姉と、私との五人で、

(38) 父と母と兄と姉と私との五人で、

(39) 父も、母も、兄も、姉も、

(40) 父も母も兄も姉も、

(41) 一、圓二三五

(42) 一、二三四、五六七、八九〇

一二、億三四五六、萬七八九〇

(3) ナカテン

・

一、ナカテンは、單語の並列の間にうつ（例1 2）。

たゞし、右のナカテンの代りにテンをうつこともある（例3）。

三、テンとナカテンとを併用して、その對照的効果をねらふことがある（例4）。

四、主格の助詞「が」を省略した場合には、ナカテンでなくテンをうつ（例5）。

五、熟語的語句を成す場合にはナカテンをうたないのが普通である（例6 7）。

六、小數點に用ひる（例8）。

七、年月日の言ひ表はしに用ひる（例9 10）。

八、外來語のくぎりに用ひる（例11）。

(1) まつ・すぎ・ひのき・けやきなど、

(2) むら雲・おぼろ雲は、卷雲や薄雲・いわし雲などよりも低く、

(3) まつ、すぎ、ひのき、けやきなど、

(4) 明日、東京を立つて、靜岡、濱松、名古屋、大阪・京都・神戸、岡山、廣島を六日の豫定で見て來ます。

(5) 米、英・佛と協商【新聞の見出し例】

(6) 英佛兩國

(7) 英獨佛三國

(8) 一三・五

(9) 昭和二一・三・一八

(10) 二・二六事件

(11) テーブル・スピーチ

九、外國人名のくぎりに用ひる（例12）。
〔附記〕外國人名の並列にはテンを用ひる（例13）。

(12) アブラハム・リンカーン
(13) ジョージ・ワシントン、アブラハム・リンカーン

(4) ナカセン

一、ナカセンは話頭をかはすときに用ひる（例1）。
二、語句を言ひさして餘韻をもたせる場合に用ひる（例2）。
三、カギでかこむほどでもない語句を地の文と分ける場合に用ひる（例3）。
四、時間的・空間的な經過をあらはす（例45）。
五、時間的・空間的に「乃至」または「より——まで」の意味をあらはす（例67）。

(1) 「それはね、——いや、もう止しませう」。
(2) 「まあ、ほんとうにおかはいさうに、——」
(3) これではならない——といつて起ちあがつたのがかれであつた。
(4) 五分——十分——十五分
(5) 汽車は、靜岡——濱松——名古屋——京都と、嵐の夜の闇をついて走つてゆく。
(6) そのきゝめは、少くとも三——五週間の後でなくてはあらはれません。

六、かるく「すなはち」の意味をあらはす（例89）。
七、補助的説明の語句を文中にはさんで、カッコでかこむよりも地の文に近く取扱ひたい場合に用ひる（例10 11）。
八、ニホンナカセン（‖）を短いくぎりに用ひることがある（例12）。

(7) 上野—新橋、澁谷—築地、新宿—日比谷の電車、終夜運轉
(8) この海の中を流れる大きな河——黑潮は、
(9) 心持——心理學の用語によれば情緒とか氣分とか狀態意識とかいふのであるが、
(10) ふと、荒城の月の歌ごゑが——あの寄宿舍の窓からも、れてくるのであらう——すゞしい夜風に乘つて聞えてくる。
(11) 方法論——それは一種の比較的形態學である——は、
(12) （東京・富田幸平＝教員）

(5) テンテン テンセン	…… … ……	一、テンテンは、ナカセンと同じく、話頭をかはすときや言ひさしてやめる場合などに用ひる（例12）。 二、テンテンは引用文の省略（上略・中略・下略）を示す（例3）。 三、テンセンは會話で無言を示す（例4）。 四、テンセンはつなぎに用ひる（例5）。	(1) 「それからね、……いやいや、もうなんにも申し上げますまい。」 (2) 「それもさうだけれど。……」 (3) そこで上述のごとき結果になるのである。…… (4) 「ごめんネ、健ちゃん。」「……」 (5) 第一章序説……一頁
(6) カギ フタヘカギ	「　」 『　』	一、カギは、對話・引用語・題目、その他、特に他の文と分けたいと思ふ語句に用ひる（例1234）。 これにフタヘカギを用ひることもある。	(1) 「お早う。」 (2) 俳句で「雲の峰」といふのも、この入道雲です。 (3) 國歌「君が代」 (4) この類の語には「牛耳る」「テクる」「サボる」などがある。

(7) カッコ ヨコガッコ	（　） （　）	二、カギの中にさらにカギを用ひたい場合は、フタヘカギを用ひる（例5）。 三、カギの代りに〃　〃を用ひることがある（例6）。 〃〃をノノカギと呼ぶ。	(5) 「さつきお出かけの途中、『なにかめづらしい本はないか。』とお立寄りくださいました。」 (6) これが雑誌〃日本〃の生命である。
		一、カッコは註釋的語句をかこむ（例1）。 二、編輯上の注意書きや署名などをかこむ（例2）。 三、ヨコガッコは箇條書の場合、その番號をかこむ（例3）。 〔附記〕なほ各種のカッコを適當に用ひる。その呼び名を下に掲げる。	(1) 廣日本文典（明治三年刊） (2) （その一）（第二回）（承前）（續き）（完）（終）（未完）（續く）（山田） (3) (ｲ) (ｲ) (a) 《　》フタヘガッコ 〔　〕ソデガッコ ［　］カクガッコ 【　】カメノコガッコ

(8) ツナギ ツナギテン	＝ ‐	一、ツナギは、かな文の分ち書きで、二語が二行にまたがる場合に用ひる（例1）。 二、ツナギテンは、數字上「より——まで」の意味に用ひる（例2）。	(1) サルハ　トウトウ　ジブ＝ ンガ　ワルカッタト　ア＝ ヤマリマシタ。 (2) 一三五‐六頁 一五六‐八頁 三五九‐六〇頁 五九九‐六〇〇頁	
(9) ワキテン	、、、	一、ワキテンは、原則として、特に讀者の注意を求める語句にうつ（例1）。 二、觀念語をかなで書いた場合にうつ（例2 3）。 三、俗語や方言などを特に用ひる場合にうつ（例4）。	(1) こゝにも一人の路傍の石がある。 (2) 着物もあげによつて兄にも弟にも使へる。 (3) ひるといふ言葉は、元來はよるに對して用ひたものであるが、おひるといつて晝飯のことを意味するやうになつたのは、 (4) ぴんからきりまである。	
(10) ワキセン	‖	一、ワキセンはほとんどワキテンと同じ目的で用ひる（例1）。 二、説明上、ある語句を一つにくるめて表示する場合に用ひる（例2）。	(1) 次の傍線を引いた語について説明せよ。 さう考へられる。 (2) 名辭は、單一の名詞から成ることもあり、あるひは長い名詞句から成ることもある。 人はパンのみにて生くるものにあらず。	
(11) 疑問符	？	一、疑問符は、原則として普通の文には用ひない。たゞし必要に應じて疑問の口調を示す場合に用ひる（例1）。 二、質問や反問の言葉調子の時に用ひる（例2）。 三、漫畫などで無言で疑問の意をあらはす時	(1) 「えゝ？　なんですつて？」 (2) 「さういたしますと、やがて龍宮へお著きになるでせう。」 「龍宮へ？」	

		に用ひる（例略）。	
(12) 感嘆符	!	一、感嘆符も普通の文には原則として用ひない。たゞし、必要に應じて感動の氣持をあらはした場合に用ひる（例1）。 二、强め、驚き、皮肉などの口調をあらはした場合に用ひる（例2）。	(1) 「ちがふ、ちがふ、ちがふぞ！」 (2) 放送のとき、しきりに紹介の「さん」づけを止して「し」にしてくれとふるので、よくきいてみると、なんと、それは「氏」でなくて「師」であつた！

(二) 主として横書きに用ひるもの

呼び名	符號	準則	用例
(1) ピリオド（大終止符・くぎり符）	.	一、ピリオドは、ローマ字文では終止符として用ひるが、横書きの漢字交りかな文では、普通には、ピリオドの代りにマルをうつ（例1 2）。 二、テン又はナカテンの代りに、コンマ又はセミコロンを適當に用ひる（例3 4 5 6）。 三、引用符・ハイフンの用例は略す。半ガッコの用例は下欄で實地に示した。	1) 春が來た。 2) 出た，出た，月が。 3) まつ・すぎ・ひのき・けやきなど， 4) まつ，すぎ，ひのき，けやきなど， 5) 明日，東京を立つて，靜岡，濱松，名古屋，大阪・京都・神戸，岡山，廣島を六日の豫定で見て來ます。 6) 靜岡；濱松；名古屋；大阪，京都，神戸；岡山；廣島を
(2) コンマ（小くぎり）	,		
(3) コロン（ナカテンの大くぎり）	:		
(4) セミコロン（ナカテンの小くぎり）	;		